

生きものの供養の多様な意味づけ —全国供養碑から見えてきたこと—

関 いずみ*¹

Various Meaning of Monuments to Pray for Life in Water

Seki IZUMI *¹

Abstract

From ancient, Japanese have held memorial services called kuyo for every object which are concerning in their daily life. And life in water are without exception. The reason is that spirits dwell in every object, which is showing the Buddhism-Animism or the original recognition, in Japanese culture, of nature and life.

The research works on relation between life in water and Japanese have been studied so far. In 2010, the questionnaire to build up the database on memorial monuments and memorial festivals were carried out for fishermen's cooperative associations and fishery organizations in the whole country, and it was turned out that the 222 memorial monuments and the 184 memorial festivals were existing. Furthermore, as the results of continuing site investigations and collection of documents and information through internetworks, the 1,141 memorial monuments were confirmed in the country in 2011.

As a result of the study on those kuyo, it is found out that kuyo have several characters such as the carried rules which are not only mourning the death of bloodshed creature and expressing their gratitude to the grace, but also praying richly catch and safety fishing hereafter, and recording the results of catch and details of extending to kuyo in the districts in the inspection of memorial monuments. Especially, it is considered that the character of making subject of the districts and inviting visitors is adding in kuyo which started in recently.

In this paper, the meanings of kuyo on creature in water are arranged on the case studies carried out up to this time. And also, the new meanings for recent kuyo which are adding characters of regional development and sightseeing are discussed briefly.

Keywords: Monuments to Pray for Life in Water, Field Work, The Original Recognition of Nature and Life, Regional Development

「いきものがたり」研究のあゆみ

「おさかなの供養碑を調査しようよ」と、田口先生から誘っていただいたのは、2009年度が始まる少し前のことだったと記憶している。これまであちこちの漁村を訪ね歩いてきたにも関わらず、迂闊にもその時点で私が供養碑に関して持っていたのは、「そういえば、漁港の中に石碑があるのを見たことがあるな」程度の認識であった。

2009年度から田口先生を代表者として始まった「魚霊供養から見る海洋資源の利用と変化—魚霊供養碑データベースの構築」(科研費挑戦的萌芽研究)では、文献やネットによる情報収集、漁業協同組合や水産関連団体を対象とす

る全国的なアンケート調査そして、学生たちも参加しての現地調査を実施した。

調査の結果、私たちは1141基(2010年9月末時点)の供養碑を確認するに至った。これら供養碑については、「魚類への供養に関する研究」(東海大学海洋研究所研究報告32号, 2011年)にまとめられ、末項に添えられた田口先生の手による生き物供養碑リストは、その後も更新され、現在1300基を超えている。また、現地調査で集められた、供養の背後にある人々と生き物との物語は、「魚のとむらい—供養碑から読み解く人と魚のものがたり—」(田口理恵編著, 東海大学出版会, 2012年)として、世に送り出された。

2011年度からは、これまでの成果をベースとして、「ア

アジアにおける生きものがたりー生き物の生死をめぐる文化的対応に関する比較研究」(科研費基盤研究B)が始まった。ここでは、生き物の死への意識と対処について、日本の生き物供養とアジアの国々における生き物と人との関係性の比較を考察することを目的とし、国内だけでなく、アジアの国々をフィールドとする研究者たちも参加しての研究となった。

この5年半の間に田口先生と共に供養碑をめぐり、あるいは供養祭に出向いた場所には、静岡県、愛知県、千葉県、石川県、富山県、愛媛県、秋田県、三重県、山口県、大分県、京都府、広島県、新潟県(佐渡島)、インドネシア、長崎県、佐賀県などがある。掃除が行き届き、花が手向けられ、地域の中で護られている供養碑。地元の人もその存在を忘れてしまっている供養碑。苔むし文字もよくわからない古い供養碑。祀る魚の姿をした遊び心にあふれた供養碑。地図を片手に、時には文献の曖昧な道案内を頼りに捜し歩き、そうしてたどり着いた供養碑のひとつひとつに、必ず手を合わせてから熱心にメモを取り写真に収めていた田口先生の姿が忘れられない。

『人は死ぬ。人が死ねば、遺族や仲間たちはその死を悼み、とむらいのための儀式を行う。遺体や遺骨、遺品を埋め、墓や塚をたて、決まった手順や作法に従って追悼の儀式を行いながら、私たちは人の死を受け入れていく』(田口理恵「魚のとむらい」より)。まだまだ田口先生の死を受け入れるには時間がかかるが、生きものがたりの語り部として、田口先生の遺志をこれからも繋いでいきたいと思う。

1. はじめに

海に囲まれた日本では、古来より水域の生物は重要な食糧として捕獲されてきた。また、沿岸部には様々な動植物が漂着する。このような水域の生物を祀る供養碑や供養祭は数多く存在している。そもそも日本人は、古来より動植物から道具などの非生物に至るまで、日常生活の中で様々な関わりを持つあらゆるモノを対象として供養を行ってきた。それは、すべてのモノには霊魂が宿るとする、日本特有の生命観や自然観を示すものとして捉えられる。水域の生物に対しても同様に、その死を悼み、人間の生命を支えてくれていることに感謝し、豊漁や安全を祈願するために、供養を行ってきたのである。

これまで、水産資源と人間との関わりについて、水域の生物の供養を切り口として調査研究を進めてきた。2010年には、供養碑や供養祭のデータベースを構築するために、全国の内水面及び海水面漁業協同組合や水産関連団体を対象とするアンケート調査を実施し¹⁾、222件の供養碑と184件の祀りの存在を確認した²⁾。さらに現地調査や文献、ネットでの情報収集を継続し、2011年の時点では1141基の供養碑を確認した³⁾。

これらの供養を見ていくと、供養には殺生した生物を悼み、その恵みに感謝するだけでなく、今後の豊漁や漁の安全を祈願したり、碑文にその時代の漁獲状況や供養に至った経緯について記すことで、地域の記録を残すという役割を担っているものなど、様々な性格があることがわかる。特に最近始められた供養の中には、地域の話作りや誘客という意味合いも加味されているものがあるように思われる。本論では、これまで行ってきた現地調査からの事例を基に、水域の生物の供養の意味について整理するとともに、最近の供養に見られる、地域振興や観光的な新たな意味づけについて若干の考察を行う。

2. おさかな供養碑の概要

水域生物の供養碑は、47都道府県すべてで確認されているが、その数については地域差がある。Fig.1では、国内にある1140基の供養碑の分布について示している⁴⁾。

供養されている生物の種類について見てみると、「魚」「魚霊」「魚魂」「魚鱗」「魚介類」などのように、特定の種類ではなく、水域の生物を包括的に捉えるものが多い。また、「魚鳥」「鳥獣魚」のように、陸域、水域に関わらず生物全般を捉えているものもある。一方で、個別の生物を対象とした供養碑も数多く存在している。個別の生物の中で特化しているのは、ウミガメ(226基)とクジラ(200基)である。クジラについては、鯨組などの手によって建立された供養碑も多数みられるが、偶然地先の海に迷い込んできて死んでしまったり、死んで浜に流れ着いたりしたものを供養しているケースも目立つ。個別に祀られた生物の種類は60種を超えるが、ウミガメとクジラを除くと、10基以上ある物は、カツオ、ハタハタ、ボラ、イルカ、アユ、ウナギなどに限られる。水域生物の供養碑の分布は概して全国的であるが、ハタハタ供養碑やボラ供養碑は秋田県に集中するなど、個別種類の供養碑には地域性が強く表れている。

供養碑の建立時期を見ると、江戸時代以降、現在に至るまで、供養碑は建立され続けていることがわかる。供養碑には建立年が刻まれていないものや文献やアンケートからは建立年が不明なものもあり、建立時期が判明しているのは1141基中688基である。Fig.2は、688基の供養碑の建立された時代について示している⁵⁾。江戸時代以前のは4基であり、現存する供養碑はほぼ江戸時代以降に建てられている。その内の47.5%が戦後に建てられたものであり、平成になって建てられたものも全体の12.6%ある。

3. 供養の意味の多様性

本章では、現地調査によって収集した供養碑や供養祭について、その意味や性格を考察しながら整理する。はじめに、供養碑の中では最も数多く見られる、「魚」「魚霊」

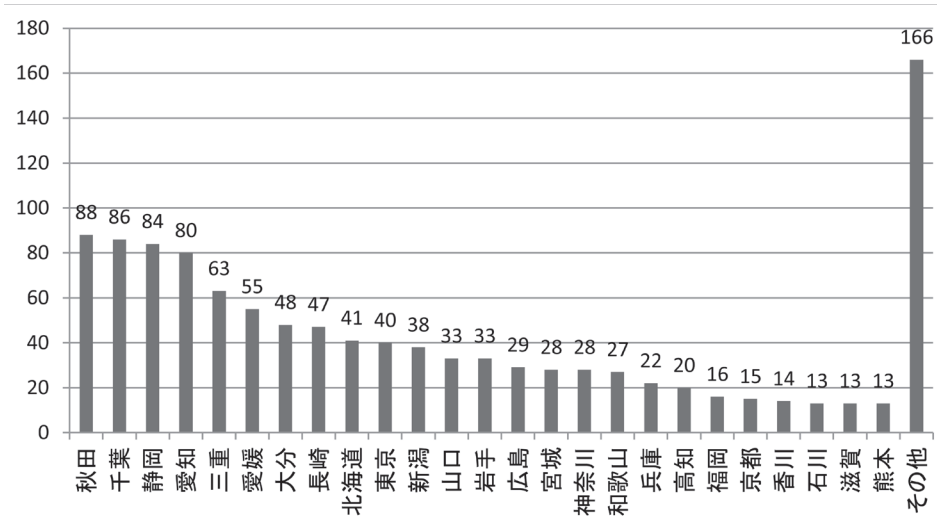


Fig.1 Total monuments in each prefecture

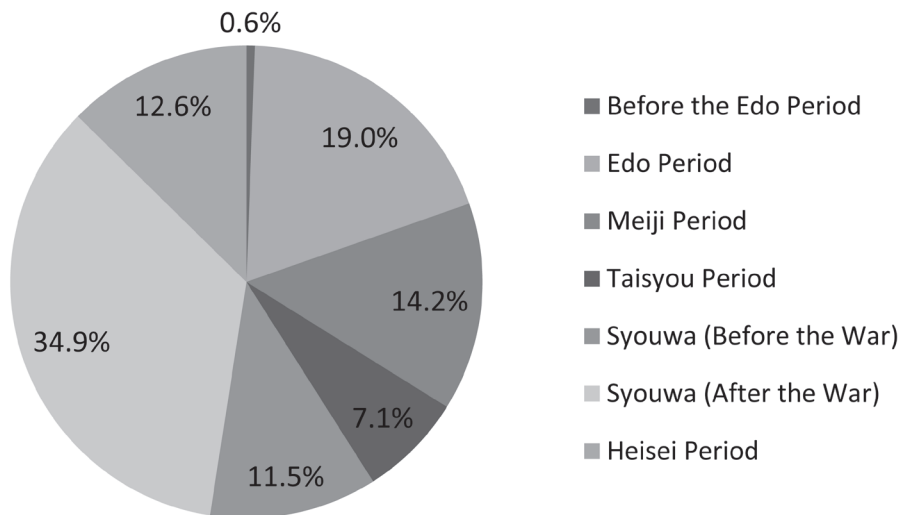


Fig.2 The percentage of the number of Monuments from each period

「魚鱗」というような、水域の生物を包括的に捉えた供養碑について紹介する。「魚鳥獣」のように水域陸域を問わず生物を複合的に捉えているものにも触れる。次に、個別の種類の生物の供養碑について述べる。個別の種類については、クジラとウミガメが特化している。この他にも、事例調査で収集した特徴的な供養碑について紹介する。三番目に、記録として印象に残った供養碑について紹介する。大漁の記録、漁業や暮らしの記録、災害の記録など、それぞれの碑に刻まれた記録からは、地域の人々の喜怒哀楽が鮮やかに蘇ってくる。四番目に、供養祭に関する事例を整理する。これまで現地調査を行った供養祭はウナギ供養、フグ供養、クジラ供養のような個別の種を祀るものであった。ここでは、これらの供養祭がどのように執り行われて

いるかを概観する。最後にイベントや観光といった新たな意味づけとして捉えられる事例について述べる。

3-1 包括的、複合的な水域生物の供養碑

水域の生物を包括的に捉えた供養碑と、生物を複合的に捉えた供養碑を合わせると292基となる（田口2010）。碑に刻まれる銘は多様である。

秋田市土崎の蒼龍寺にある「萬魚供養塔」は1858年に地元の魚問屋仲間によって建立された（写真1）。新潟県新潟市の吉祥院の魚籃観音は1929年に鮮魚問屋によって建立され「魚介供養塔」と書かれた石柱の上に立っている（写真2）。石川県珠洲市には「巨鯨魚介類慰霊碑」（1988年建立）（写真3）。静岡県沼津市の住本寺には「爲海獣魚類之



写真1 秋田県秋田市土崎 蒼龍寺
「萬魚供養塔」



写真2 新潟県新潟市 吉祥院 魚籃観音



写真3 石川県珠洲市 「巨鯨魚介類慰霊碑」



写真4 静岡県沼津市 住本寺 「爲海獣魚類之霊供養塔」
左側はジンベイザメの墓

霊供養塔」(写真4)がある。住本寺の供養塔は、伊豆三津シーパラダイスで飼育された生物を対象とする供養塔である。三重県津市では九鬼浦の漁業が不振になった際に、大漁を祈願して魚籃観音を建立した。広島県吉浦町では、埋め立てによって水域の生物の住処を奪ってしまったことへの悔恨によって「魚魂の碑」を建立した(1983年)。広島県の箱崎港の防波堤上には「魚貝藻之霊塔」(1944年)(写真5)、広島市住吉神社には「魚貝類慰霊碑」(1990年)(写真6)、広島市向洋の住宅街にも「魚貝藻碑」(1979年)(写真7)がある。大分県佐伯市には、二つの「魚鱗塔」がある。一つは「安永四乙未年」(1775年)のもの

で、もう一つは「平成三年度佐伯市政五十周年記念」と記されている。

生物を複合的に捉えたものには、秋田市土崎の善導寺にある「魚鳥供養塔」(1939年建立)や、三重県木本町の「諸魚類萬霊之供養塔」(1982年建立)、三重県亀山市の「鳥獣魚供養塔」(1975年)(写真8)、広島市多聞院の「鳥魚供養碑」(写真9)、静岡県熱海市の「魚鳥供養塔」(1959年)、伊豆の国市修善寺の「魚鳥供養碑」など、枚挙にいとまがないほど多くの供養碑が存在している。



写真5 広島県箱崎港 「魚貝藻之霊塔」



写真6 広島県広島市 住吉神社
「魚貝類慰霊碑」



写真7 広島県広島市向洋 「魚貝藻碑」



写真8 三重県亀山市 「鳥獣魚供養塔」

3-2 個別の生物の供養碑

(1) クジラの供養碑

クジラの供養碑を大きく分けると、捕鯨によって殺生したクジラを供養するものと、何らかの理由で漂着したクジラの霊を慰めるものがある。千葉県のア房勝山は房総半島の捕鯨発祥の地であり、江戸時代には鯨組が組織されていた。この地域で捕獲されていたのはツチクジラで、当時の捕鯨の目的は鯨油にあった。鯨肉は周辺から「突組」要員として集められた船持ちの漁民たちの取り分となり、こ

のことは、安房地域にクジラ食文化を浸透させた要因となっている。鯨組を組織したのは、勝山の名主であった醍醐家で、1815年から1869年の55年間に440頭のクジラを捕獲したという記録が残っている。安房郡鋸南町板井ヶ谷の弁財天には、醍醐家の7代目当主が寄進したという祠があり、その祠を取り囲むように、石宮が立ち並んでいる。これらは、クジラの解体作業にあたった「出刃組」が、クジラの供養のために毎年1基ずつ奉納した鯨塚である（写真10）。弁財天の境内には、120基もの鯨塚があったという記録が残されているが、現在では風化してしまったために埋



写真9 広島県広島市 多聞院 「鳥魚供養碑」



写真10 千葉県鋸南町 板井ヶ谷 鯨塚



写真11 佐賀県唐津市 中尾家墓地内
「万霊鯨鯢成佛」



写真12 佐賀県唐津市 龍昌院「鯨鯢千本供養塔」

めてしまったものもあり、残されているのは50基程度である。

佐賀県唐津市呼子町の中尾家は、1700年頃から1877年までの約170年間、8代にわたって捕鯨を行った鯨組主であった。その中尾家の墓地脇の藪の中に、「万霊鯨鯢成佛」と刻まれたクジラ供養碑がある（写真11）。建立は延享五年（1748年）となっている。また、この共同墓地にほど近い石上山龍昌院には、中尾七代雄之助組による「鯨鯢千本供養塔」が建てられている（写真12）。この供養塔は天保

二年（1831年）のもので、七代目中尾甚六が、中尾組による捕鯨が始まって以来、捕獲したクジラが千頭に達したために、クジラの霊を供養するために建てたという。龍昌院はクジラの霊を慰めるために、宝暦五年（1755年）に三代目中尾甚六によって建立されたが、その背景には、親子連れのクジラが夢枕で命乞いをしたが捕獲してしまい、祟りがあったという話が残されている。そのため、龍昌院はクジラ1頭分の代金で建てられたという。

長崎県壱岐市も、捕鯨が盛んに行われた地域であった。壱岐市芦部町には、「奉読誦大乘妙典一千部」と刻まれた、高さ2メートル40センチという大型の石碑がある（写真13）。建立されたのは享保二年（1717年）で、左側面には「此組連続吉祥」、右側面には「鯨鯢速証菩薩」とある。台座には「布屋 土肥 布屋 許斐 篠崎」とあるが、これらは壱岐の鯨組の名である。また、壱岐市勝本町には原田氏が頭となる「勝本鯨組」があった。勝本鯨組に



写真13 長崎県壱岐市
「奉誦大乘妙典一千部」



写真15 愛媛県伊予市 湊神社
「克鯨 一字一石塔」

よる利益は、藩主の参勤交代の献金となっていたようで、後に原田氏は、クジラを末永く獲り続けられるようにと、平戸藩主から「永取」の名をもらい、「永取家」として捕鯨に携わった⁶⁾。この永取家による「鯨供養塔」は、勝本港に面した民家の石垣の上に建てられている(写真14)。このように隆盛を誇った壱岐の捕鯨も、明治30年代になる



写真14 長崎県壱岐市 永取家「鯨供養塔」

と次第に捕獲数が減少し、やがて衰退していった。

クジラの供養碑の中には、たまたま漂着してしまったクジラを祀るものも多い。石川県珠洲市の「巨鯨魚介類慰霊碑」(写真3)は、明治以来3回漂着したクジラ(明治11年と昭和26年は白長須鯨、昭和62年は鰐鯨と刻まれている)の霊を慰め、併せて古来より人々の生活のために犠牲となった幾多の魚介類を供養するために、1988年に建てられた。

愛媛県伊予市の湊神社にある「克鯨一字一石塔」は、1910年に建てられた(写真15)。その由来についての説明が、2005年に建てられているのだが、これによると、1909年に沖にマッコウクジラが棲みついてしまい、普段の漁業の邪魔になるので地元の漁業者は困っていたが、めったにクジラなど来ることのない地域のことであり、どうすることもできなかった。そこで、下関の捕鯨会社に応援を頼んで捕獲してもらったという。浜に引き上げるには、牛2頭と数百人の人々が駆り出された。このクジラを供養するために建てられたのが、この供養碑である。

(2) ウミガメの供養碑

ウミガメはクジラと並んで個別の種としての供養碑が多く見られる。本州太平洋沿岸から日本海沿岸までその分布は全国的であるが、千葉県や静岡県、遠州灘、愛知県知多半島、和歌山県、新潟県佐渡島などは、ウミガメに関する供養碑が集中している地域である⁷⁾。ウミガメの場合、死骸として浜に打ち上げられていたり、産卵のために上陸して死んでしまったりしたものを供養するが多い。孵化できずに、あるいは孵化して海に戻る途中で死んでしまった子亀を供養するものもある。供養碑というよりは、死骸そのものを埋葬する墓も目立つ。

愛知県南知多町の内海川の河口には「爲亀翁善生之墓標」、通称お亀さんの墓がある(写真16)。同じく南知多町



写真16 愛知県南知多町 「爲亀翁善生之墓標」



写真17 愛知県南知多町 地藏堂「摩訶龍亀大菩薩之塔」



写真18 静岡県御前崎市 浜岡原子力発電所「亀塚大明神」

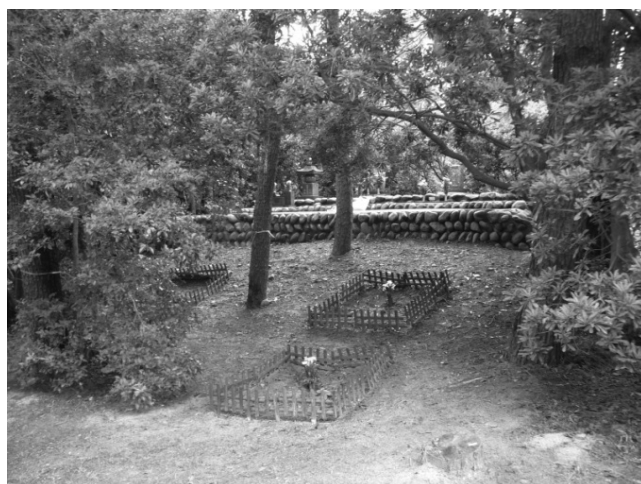


写真19 静岡県御前崎市 浜岡原子力発電所 亀のお墓

の正衆院の亀塚は、漁網にかかって死んだ亀を漁民が正衆院に運んで埋葬したもので、十数基のウミガメの墓があるという。しかし、現在は新たに建てられたペットの墓が目立っている。南知多町の峠の地蔵（地蔵堂）にもウミガメの供養碑がある。「摩訶龍亀大菩薩之塔」は木製の供養塔（写真17）で、1988年に建立されている。昔のウミガメの墓地も残っており、「摩訶龍亀大菩薩 昭和三十四年十二月 山本」と彫られた石碑が、半ば埋もれたままになっている。

静岡県御前崎市の中部電力浜岡原子力発電所内にも亀塚がある。「亀塚大明神」と彫られた石碑で、1883年に佐倉村船元中の建立となっている（写真18）。かつて漁業が盛

んだところ、ウミガメの死体を見つけた漁師がこれを埋葬したが、その漁師の船だけが不漁続きとなったために、塚を建てて祀ったと言われている。いつしか忘れ去られていたが、1971年に原発の敷地内に埋もれていたのが発見された。中部電力では、新たに亀の形の台座を作り、亀塚と共に掘り起こされた馬頭観音と合わせて設置し、原発の安全祈願と供養祭を行っているという。この亀塚の周辺には地面を柵で囲い花を活けている場所がいくつもある（写真19）。これは、原発の冷却水に使う海水の取水口から入り込み、貯蔵用のプールで死んでしまった亀を埋葬したものである。取水口から入ってくるウミガメは年間20頭前後おり、その1割程度は死んでしまうという。

毎年アカウミガメが上陸する御前崎市は、ウミガメの産卵地として国の天然記念物に指定されている。ウミガメの孵化場には、孵化できなかつたり、放流前に死んでしまった子亀を供養する「子亀塚」（写真20）がある。子亀塚の前では毎年供養祭が行われる。



写真20 静岡県御前崎市 ウミガメふ化場「子亀塚」



写真22 秋田県男鹿市 船川漁協「鰯供養碑」

(3) その他の個別種の供養碑

クジラやウミガメの碑のように数は多くないが、供養されている個別の種は多様である。秋田県などは、調査した中でもとりわけ供養碑が多く、供養される種の数も豊富であった。その種類を挙げると、イルカ、サケ、マス、ボラ、ハタハタ、イワシ、イワナ、エビ、ウミガメ、シシユ、シジミ、ドジョウ、ワカサギ、ヤツメ、複合的なものとして「鳥居」、「魚鴨」、そして包括的な供養碑が確認された。秋田県を代表するハタハタについては、とりわけ印象深い供養碑が多い。男鹿市船越海岸の小高い丘の上に、海に向かって潮風に洗われたような質素な鳥居がぼつんとある。これが鰯神社である(写真21)。鳥居の背後には、



写真21 秋田県男鹿市 船越海岸「鰯神社」



写真23 秋田県男鹿市 八龍神社

一体の地藏と庚申塔、そして、6基の供養碑が建っている。供養碑は鳥居に向かって左から「鰯大漁供養塚」(1905年)、「鰯供養塔」(1908年)、「鰯大漁供養塚」(建立年不明)、「雷魚大漁塚」(1926年)、「鰯塚」(1901年)、そして二列目の真ん中に当たる位置に「雷魚供養」(建立年不明)となっている。雷魚とはハタハタのことであり、ハタハタの漁期である冬場には、よく雷が鳴るためにこのような異名がついている。新しいものでは、船川漁協によって1992年に建てられた「鰯供養碑」がある(写真22)。供養碑の文字の上には、波と雄雌のハタハタの姿が彫られている。

男鹿市船越の八龍神社には、参道の両脇にいくつもの供養碑が並んでいるが(写真23)、ここにも個別の種類供養碑がいくつか認められる。本堂に向かって左側には、「小魚供養塚」(1934年)、「若鷺供養塚」(1912年)、「湖鰯供養塚」(1861年)、「魚類供養塚」(1916年)。右側には「鰯供養塚」(1941年)、そして、供養碑ではないが、「船越



写真24 高知県四万十市 四万十西部漁協
「よみがえれ鮎」



写真26 静岡県西伊豆町 安良里地区「いるか供養之碑」

漁協解散記念碑」(2002年)が建っている。数々の供養碑に囲まれたこの記念碑は、地域漁業を支えた漁協への感謝とその終焉を供養する碑のようにも感じられる。

何らかの事故や、不漁が続く、天災や人災によって漁場が喪失するなどの状況が起きた時に、その事態を好転させ、あるいはそのために失われた命を弔う目的で碑が立てられることがある。この場合は、碑には明確なターゲット



写真25 愛媛県伊予市双海町 様々な石碑

となる生物の名前が刻まれることが多い。高知県四万十西部漁協では、1997年に「よみがえれ鮎」と記した供養碑を漁協事務所に建立した(写真24)。アユ供養は、組合設立当初より行われていたようだが、近年の漁獲減少等により、漁協で供養碑を建立、豊漁祈願と鮎供養を祭事として行っている。

愛媛県伊予市双海町の旧道沿いには、おそらく近隣から移設されてきた、地蔵や祠、供養碑が並んでいる(写真25)。その数は26基、内水域生物の供養碑は7基ある。供養の対象となっているのは、サワラ、イワシ、タコで、明治から昭和初期にかけての建立となっている。近隣の地区には「鯨供養塔」がある。これは1949年に大漁に発生したフカの霊を慰めるために建てられた。終戦直後の食糧難の折、射止められた40尾のフカは、疲弊した地域にとって数少ない良い出来事だったに相違ない。

3-3 地域の記憶の記録と伝承

ある生物が大量に捕獲された、災害などによって大量に斃死した、といった特別の事態が起きた時に、その事を記録するとともに、そこに関わった生物を供養する碑もある。クジラやウミガメについては、弱ったり死んだりして浜に打ち上げられたものを祀ったというものが多く、いつ、どういう状況で打ち上げられ、それをどうしたかといった状況についての記録を伴う供養碑がしばしば認められる。このように供養碑には、地域の記憶を留め、次の世代へと継承していく役割を持っているものもある。

静岡県西伊豆町安良里地区には、イルカの供養碑が3基存在する。1882年の碑は「海豚供養之碑」と彫られ、600頭以上のイルカ追い込みに成功した際、円覚寺(鎌倉市)の高僧を龍泉寺に招いて供養のために浜施餓鬼を行ったことが書かれている。捕獲されたイルカは、魚商が買い取りに来るまで、湾の港口に網を張って20日余り生かしておい



写真27 神奈川県川崎市 川崎大師「海苔供養祭文碑」

たという。1935年の碑は「海豚供養碑」とあり、1932年1月28日に1,472頭のイルカを捕獲したことを記念したもので、「捕終同二月二一日」とあることから、およそ1ヶ月かかる大漁だったことがわかる。1949年の碑には「いるか供養之碑」とあり（写真26）、「海豚組合の発願により上記昭和九年より同二四年一〇月に至る間の漁獲五萬三千四百二十五頭の供養碑」として建立されたとある。碑の背面には、1934年から1949年に至る捕獲頭数が記録されており、「昭和十七年から二一年に至る大東亜戦時漁船の徴用空襲下の不況並びに戦後の食糧事情において、食料資源に貢献し村民を救った功績」とあることから、特に戦中戦後に豊漁が集中したことで、厳しい食糧難の時代に、イルカが集落を救ったことに対する感謝の念が伺える。イルカ漁は村中が一体となって、組織的に行われた。それぞれの役割が決まっており、イルカによる収益については、村中の人が恩恵にあずかれるような分配の仕組みができていた。現在安良里地区でイルカ漁は行われていないが、これらの供養碑は「安良里いるかの会」という地元有志による組織によって守られている。

神奈川県川崎大師境内には、海苔養殖に関する2基の碑がある。一つは1920年に建立された「海苔養殖紀功之碑」である。碑文には、当該地域の海苔養殖の始まりと発展の様子が刻まれている。この地域の海苔養殖は、1871年に石渡四郎兵衛、石川長兵衛、川島勘左衛門、櫻井佐七の

4人の村人によって始められた。当初は2万坪の海面使用権しかなかったが、やがて面積は17万4千余坪にまで拡張し、海苔採取営業組合を組織し品質向上や販路拡大を行い、組合員も500人に増え、初めは品質も悪く、年間生産額が1万円にしかならなかったものが、数十万円の生産額を得るようになった。海苔養殖の華々しい展開を刻む碑と隣り合わせに建てられているのが「海苔供養祭文碑」である（写真27）。これは1986年に建立されたもので、「海苔の精を招魂して川崎漁業協同組合主催のもと至心に海苔供養祭を厳修す」とある。改良を重ね、全国に知れ渡るまでになった海苔養殖は、高度経済成長期に東京湾の大規模な埋め立て工事が進み、1971年の埋め立てが決定したことで、漁業権を放棄せざるを得なくなってしまった。「これ時代の趨勢なりといえども凡そ永年海苔養殖の業務に従事せる人等にとって、その想い痛恨にして心情を察するに余りあり。いまここに曾って生業とせし豊かな海苔の精を招魂し、懇に供養の志を運ばるるは報恩のあらわれにして、まことに尊き浄業と謂つべし。」⁸⁾時代の流れと共に、地域を支えた一つの産業が終焉していくことの無念さが記録されている。この碑の最後には、「重ねて乞う一佛成道・観栄法界・草木国土・悉皆成佛」と記され、100年続いた海苔養殖の終焉を記念するとともに、これまで生活を支えてくれたノリへの感謝が込められている。

石川県穴水町の弁天島には、1973年に建立された「魚霊塔」がある（写真28）。明治初期から前波地先1,200メートル沖合で、前波部落と沖波部落の一部の百姓が持つ特権として、稲荷崎咲鯛網があったが、不漁が続く1951年の漁業権解放と共に漁場が自然消滅した。やがて1963年に漁場改訂が行われ、前波部落前漁民の手によって、地先2,040メートル沖合で、鯛大敷網を設置、福井県の水産会社の協力を得て、大敷網は発展したという。この供養碑は、創業10周年を記念して、前波大敷網組合により建立された。これなども、地域の漁業の沿革を現在に伝える役割を担った碑となっている。

3-4 いきものの供養祭

いきものの供養祭は、概して漁業者や加工業者、飲食店（フグやウナギ）のように、殺生を伴う生業に従事しているものが、対象となる生物への追悼や感謝の意を表すというもので、全国的に行われている。供養のための放生会（放流）を伴う場合もある。

静岡県浜松市においては毎年8月にウナギ供養祭が行われている（写真29）。これは静岡県のウナギの養殖組合の主催で行われる供養祭で、浜名湖畔の魚籃観音の足元で僧侶の読経、その後ウナギの放流が行われている。参列者はウナギ養殖業者や販売業者、飲食店関係者などである。

京都の三嶋神社は、後白河天皇の皇后が子宝を祈願して三嶋大明神に参ったところ、後継ぎを授かったということで建立された。ウナギを神の使いとして信仰しており、毎



写真28 石川県穴水町 弁天島「魚霊塔」



写真29 静岡県浜松市 浜名湖 鰻供養祭



写真30 京都府京都市 三嶋神社 鰻供養祭



写真31 京都府京都市 高台寺 ふぐ供養祭

年ウナギの供養祭が行われる（写真30）。神社には江戸時代より「禁食鰻文書」が伝わっており、現在も住職はウナギを口にしないという。ここでも、供養祭の最後にはウナギの放流が行われる。ただし、ここでは水槽に入れたウナギを神社内の池に移すというもので、形式的な放流である。

全国ふく連盟は各地のフグ料理店関係者によって組織されている。ふく連盟では、毎年春に京都の高台寺でフグ供養祭を催し、加盟する団体が全国から参集する。高台寺にはふぐ塚があり、その前に祭壇がしつらえられ、フグが供えられる（写真31）。

山口県長門市青海島の向岸寺では、毎年5月に鯨法会が行われている。この寺には、解体した母クジラの体内から

出てきたクジラの胎児の墓地や、クジラの位牌、鯨鯢過去帳などがある。過去帳には、捕獲したすべてのクジラについて、捕獲場所や捕獲の年月日、鯨の種類、体長、値段、そして戒名が記されている。現存するのは3冊で、数千頭分のクジラの記録が現存するという。鯨法会の際には、この過去帳や位牌が並べられ、通鯨唄保存会による鯨唄が披露され、住職による読経と参列者による焼香が行われる。地元の子供たちも学校教育の一環として鯨法会に参列する（写真32）。

3-5 供養の新たな意味づけ

近年の供養碑や供養祭には、対象となる生物の供養とともに、供養祭という行事を創り出すことで、地域の認知度を高めたり、そこに人を呼び込んだりすることを狙った形が出てきている。

日本海側の有数なナマコ産地である七尾市石崎漁港で



写真32 山口県長門市青海島 向岸寺 鯨法会



写真33 石川県七尾市 ナマコ供養祭



写真34 石川県七尾市 供養祭でのナマコの放流

は、2010年3月6日に初の「なまこ供養大漁祈願祭」が開催された。主催しているのは石川県七尾市の能登なまこ加工協同組合である。翌年からは「全国なまこ会議」が開催されるようになり、2012年には、全国なまこ会議となまこ供養大漁祈願祭が統合されて、「全国なまこサミット」と改称された。

2014年3月に、「全国なまこサミット2013」に参加した。プログラムは、一日目が第1部の講演とパネルディスカッション、第2部の能登なまこ創作メニュー大食談会。二日目が第3部なまこ供養祭・稚なまこ放流、そして第4部の能登なまこ公募作品表彰式と、二日間にわたる一大イベントとなっている。

七尾市のナマコ供養祭では、「全国のなまこに感謝し生産者・加工・流通・行政が一体となつてなまこをアピールしよう」をスローガンに掲げている。第1回全国なまこ会議では社会文化と生物多様性の側面から、第2回会議では商業、流通面からというように、毎回テーマを決めて、講演や意見交換が行われている。

2014年のなまこサミットでは、「なまこで地域の魅力づ

くり」がテーマであった。第1部では、講演とパネルディスカッションが行われた。登壇者は、青森県の行政や弘前大学の教授、石川県漁協、なまこサミットを主催する能登なまこ加工協同組合となっていた。第2部は能登なまこ創作メニュー大食談会が行われた。会場には、石鱈や化粧水、うどん、カレー等、ナマコを使った加工品が展示された。翌日は漁港の荷捌き所で供養祭が執り行われ（写真33）、その後、地元の子供たちによってナマコが放流された（写真34）。二日間は盛りだくさんな内容で、青森からはナマコ研究者だけでなく、ナマコのご当地キャラまで来訪していた。厳粛なる供養の面と、人に「見せる」ことを意識したイベント的な側面とが混在した供養祭となっていた。

ナマコ供養の目的は、供養だけでなく、むしろ地元での認知度をあげることが主体となっているように感じる。その背景には、当該地域をナマコの中心地とするために、年に1回全国のナマコ関係者を呼ぶ場を作りたかった、という思いがある。さらに、将来的には下関市のふく供養祭のように、観光客を集めるイベントとして展開することを狙っている。ナマコの供養碑はまだないが、後々は碑の建立も計画しているという。

供養の意義は一つではなく、複数の意味が同時に含まれていることが考えられるが、地元のPRや観光といった観点は、最近新たに加わった意義と考えられる。

4. おわりに

生物に対する供養は、時代を超えて継続している。しかし、その意味合いは、地域や祀る人々の意識、そして時代によっても少しずつ異なる部分があるのではないだろうか。本論では、これまで収集してきた供養について、整理

する視点を模索するために、できる限り事例を取り上げて特徴づけることを試みた。しかし、供養についてはリストには挙げているものの確認作業が済んでいないものが多数ある。

水域の生物に関する供養の実態については、故田口理恵先生によって情報収集が行われ、初めてリスト化されて示されることとなった。しかし、ようやく事例が収集できたという段階であって、本来ならば、ここから研究が深掘されていくという途上であったことは否めない。今後は、この研究に共に参加したそれぞれの研究者によって、少しでも研究が進められていくことが求められていると思う。

そもそも、魚霊供養とは、殺生してきた生物に対しての感謝と敬意を表すことが第一義的な目的であったが、最近新たに開始された供養や、これまでの供養が衰退した後に、祀りや碑そのものの保護を行うグループが現れるといった事例が見られる。このような動きの背景には、生物への供養という気持ちはもちろんであるが、供養を通じた地域活性化や観光のための誘客といった新たな意義が含まれていると考えられる。今後は、こういった事例を分析することで、これからのいきもの供養の地域における位置づけやその役割について考察していきたい。

註

- 1) 科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究, 「魚霊供養から見る海洋資源の利用と変化－魚霊供養碑データベースの構築－」, 研究代表者・田口理恵, 2009年度～2011年度
- 2) 関いずみ・田口理恵 (2011) 「漁村における水域生物の

供養の現状と意義」, 北日本漁業39号, pp199 - 205

- 3) 田口理恵・関いずみ・加藤登 (2011) 「魚類への供養に関する研究」, 東海大学海洋研究所研究報告第32号, pp53 - 97
- 4) 田口理恵他 (2011) 「魚類への供養に関する研究」, 東海大学海洋研究所研究報告第32号, p59より作成。ただし、本稿では海外に立地する一基は除いている
- 5) 田口理恵他 (2011) 「魚類への供養に関する研究」, 東海大学海洋研究所研究報告第32号, p60より作成
- 6) 鯨文化 HP <http://www.geocities.co.jp/NatureLand-Sky/3011/kujirahaka.html>
- 7) 田口理恵編著 (2012) 「魚のとむらい」, P72
- 8) 川崎大師「海苔供養祭文碑」の碑文より引用

参考文献

- 田口理恵・関いずみ・加藤登 2011 「魚類への供養に関する研究」『東海大学海洋研究所研究報告』第32巻, pp53-97
- 田口理恵編著 2012 「魚のとむらい 供養碑から読み解く人と魚のものがたり」東海大学出版会
- 関いずみ・田口理恵2011 「漁村における水域生物の句の現状と意義」『北日本漁業』第39号, pp199-205
- 千葉県安房博物館 1993 「鯨の文化誌－鯨と私たちのくらし－」, 集賢社
- 壱岐市立一支国博物館 HP <http://www.iki-haku.jp/>
- 唐津市観光協会 HP <http://www.karatsu-kankou.jp/nakaokeyashiki/>
- 鯨文化 HP <http://www.geocities.co.jp/NatureLand-Sky/3011/kujirahaka.html>

要 旨

古来より日本人は、日常生活の中で関わりを持つあらゆるモノを対象として、供養を行ってきた。水域の生物についても例外ではない。それは、すべてのモノに靈魂が宿るとする、日本特有の生命観や自然観を示すものである。

これまで、水域生物と日本人のかかわりについて調査研究を行ってきた。2010年には、供養碑や供養祭のデータベースを構築するために、全国の漁業協同組合や水産関連団体を対象とするアンケート調査を実施し、222件の供養碑と184件の祀りの存在を確認した。さらに現地調査や文献、ネットでの情報収集を継続し、2011年の時点では、国内外に1141基の供養碑を確認した。

これらの供養を見ていくと、供養には殺生した生き物を悼み、その恵みに感謝するというだけでなく、多様な意味づけがなされていることがわかる。本論では、これまで行ってきた現地調査による事例について、①水域の生物を包括的に捉えた供養碑や水域陸域を問わず生物を複合的に捉えている供養碑、②個別の種類の生物の供養碑、③地域の記録を伝承している供養碑、④個別の種の供養祭、⑤イベントや観光といった新たな意味づけとして捉えられる供養、という視点から分類し、水域生物の供養の意味について整理するとともに、最近の供養に見られる、地域振興や観光的な新たな意味づけについて若干の考察を行った。

キーワード：おさかな供養、現地調査、生命観・自然観、地域振興